

寡婦の祕密

水野仙子

或時小夜子は物を縫ひながらふと、前後になんの續きもなくこんなことを思ひ出した。それは今まで考へても見ようとしてない、全くそれはふと、何かのはずみに浮き出した記憶であつた。

小夜子の生れたところは、東北の或る小さい田舎町で、御維新こつち國道の兩側に細長く展开了商業地であつた。冬になると——小夜子の印象にはいつも冬のみが生きて居たから——どんよりと曇つた。外といふ外に水蒸氣の影をひそめた日ばかり多くていつかはら／＼と降るともなく散つて來る雪にさへ水氣のない霰まじりのほろ／＼したのが、馬の尿の雪を解かして凍つた地べたへ、或は捨てられた密柑の皮の中へほろ／＼と轉び込む、ときういつたやうな日が時を綴つて行く。馬を曳いて買物に出て來る近在の人は、十一時頃から三時頃までの間に、大概町の用をすまして、又とツ／＼と手綱を曳いて歸つて行く。顔をちつぱり布で包んで、むく／＼と鐵砲袖に着ふくれて、脛まで届く藁靴を履いて——若しそれがピチヤ／＼と道に鳴るやうであつたら、檐の氷柱のゆるんだ日、泥まじりに雪の道が解けかけた日で、つまり言へば暖いのである。

若し又、朝から、或は明け方から、凹巴の喩へは陳い、小粒は大粒を追ひ、大粒は小粒と小粒の間を填めて、後から／＼と、又後から／＼と猶豫もなくその癖焦心りもしないで音もなく降り積む雪の日ならば、人出のないのを見越したやうに、いづれもの

家が部を下して、潜りを閉めて、薄暗くなつた店で番頭達は講談本でも讀んでゐるふ風、此時よくくで通る人があつたら、手も足も顔も見えぬ、たゞ黒い塊りが、むく／＼と獸のやうに動いて行くのか見られるだけである。そして時々、物好きな小僧が尺度を持つて出て、もう幾寸積つた——などと言つて居る。

そんな記憶は絶た江小夜子の頭の中に潜んで居る。

小夜子の生れた家は、その町の北のはづれの東側で、家と家の間の空地を潜つて突き當ると、「ゆ」とした字のかすれた瓦斯燈がしよんぼりと立つて居る、そこがさうであつた。板の間を洗う終ひ湯の音を寝耳に聞きながら、家中に漲る湯氣に蒸されて小夜子は育つたのである。夜になると、洋燈も何もぼんやりと曇つてしまつてガヤ／＼ワヤ／＼といふ響きが家中一つぱいに籠つてしまふ。そして、時々そのガヤ／＼ワヤ／＼を判然させるやうに、鋭い聲で赤子が泣き出す。

さういふ光景を小夜子は十二の年まで見た。その年無智な正直な父母は、天理教の爲めにすつかり家屋敷を入れあげてしまつて、土地に居られないやうな見窄しさになつてしまつたのである。小夜子は併しそれからが幸福であつた。彼女は遠い處の、子供のない裕かな伯母の手に渡されたのであつた——。

その十二までの友達に、まさ代さんといふのがあつた。學校は同級、家は近し、二人は隨分仲善く遊んだ。學校の歸りに喧嘩をして、家に歸つてお錢を貰つて、何か買つて來る歸りには、必とまさ代さんの家に寄つて喰べた。まさ代さんの家は、茶店兼旅籠家で、間口の馬鹿に廣い、さうして其大部分が

土間どまであつた。その土間に背の高いおへつついが並んで居る。さうして棚には丼どんぶりだの茶碗ちわんだの椀などが伏せて並べてある。草鞋わらぢのまゝ踏み込んであたられるやうになつて居る大きな切爐きりろには、煤すすけた自在鍵じざいかぎにまんまるい大きな鐵瓶てっぴんが下つて居る。或時はそこに煮豆の匂ひがしたり、チロくと燃える焚き火たたかひのぐるりに、串に刺した茸たけなぞが眞黒あぶになつて炙ひられて居たりする。

晝時分ひるになると、一人二人の客が、防寒具のまゝ爐ろぶちに陣取つて、豆腐のお汁つゆなど、大きなお握むすびを噛かつて居る。茶屋としてはちつとも繁昌はんじやうする方でなかつた。その代りこの家の餌飪うどんだけは一寸知られて居た。ひもかわを一ぱいと云つて、馬には近所の豆腐屋から豆腐の湯なんぞを貰つて來てあてがつて夕方の歸り路かへりぢに寄つて行く人があつた。

小父おぢさん——小夜子からいへば——は、一寸面白い人で、まさ代さんにも優しかつた。釣りの好きな毎日のやうに竿かづを擔いで魚籠ひくをさげて、大黒池といふのに釣りに行つて居た。それにつけて小夜子が思ひ出せるのは、まさ代さんと二人でいつか其釣りに連れて行つて貰つたのと、小父さんがお酒を飲んでるところに行き合して、無理く一口飲ませられた時のお肴さかなだつたきんぴら牛蒡ごぼうが、涙が出るほど辛かつたことである。その小父さんは、まさ代さんと小夜子が十一の時に腹膜炎ふくまくじんで死んだ。煤すすのやうな嘔吐へどを吐いて、(それはまさ代さんがその時小夜子に報告した言葉である) 苦しんで死んでしまつた。

廣い家にまさ代さんは小母おばさんとたつた二人になつた。もとから下婢かひなどを置いて手廣く旅籠屋をやつて居たのではないので、離れ二た間に表二階二た

間は女二人に廣過ぎた。けれども小母さんは、別段下宿人を置かうとするでもなかつた。一體今考へると、あの家の本業はなんであつたかと思はれるほど總てがいゝかげんのものであつた。小父さんが生きて居る時分からさうだが、格別愛嬌を振り撒まいてお客様を呼ぼうとするでもなく、軒のはづれに下げてある『諸國御商人御泊所』といふ看板を見當てにして夕方なぞに辿り着く商人を、

『無人むにんなもんですから……。』と言つて、愛想あいそつけなく斷つて居た。ほんのよくよく知つた人ばかり泊めるんださうである。小夜子は曾かつてそんな時に居合して、成程なるほどそんなものだらうと思つたことがあつた。離れに泊つたお客様が、夜半よながに強盗と變つて女親子を脅かす——? さうだ、そんなことが無いとも限らないと思つて、小夜子は知らない客人を泊めないことに感心して同意した。

まさ代さんが學校に行くと、小母さんは全く一人ぼっちになつてしまふのである。小母さんは時々、寂しさうに往來を眺めながら餌飪うどんを踏んで居た。少し蓄妻滓そばかすはあつたが、若い時は美人のうちだつたらうと思はれるやうな顔容かおだで、髪はいつもキチンといゝ加減まげの鬚ゆに結つて居た。あんまり華はなやかに笑つたことのない人であつた。

或る晩——多分それは舊正月時分だつたやうに思はれる。小夜子はまさ代さんの家に遊びに行つてたつた二人で雙六すうろくをやつて居た。小母さんは長火鉢のふちに肘をかけて、鐵瓶の胴を爪でカチくく叩きながら、何かものを考へるやうな風ふうで、二人の小娘が遊ぶのを見て居た。まさ代さんが時々例の調子の張つた聲でさも可笑しさうに笑ひ出すと、小母さん

も引き入れられたやうにうつすり笑つたりなどして居た。小夜子はさうして暫くまさ代さんと勝負を夢中になつて居ると、やがて離れの渡し廊下がギィギィと鳴つて、

『大へん面白さうだね、エ まつちゃん。』と、障子を開けてお客様が出て來た。

先刻から離れに咳の音がしたり、いつになく灯影もさして居るので、小夜子は例のお客さんだらうと別に氣にもとめずに居たのだが、その聲でふと振り向くとやつぱりその人だつた。それは近い村のお寺のお坊さんとかで、町に出て來るたびにまさ代さんの家に泊まることになつて居たのである。小父さんが生きて居た時分からのお客であつた。で小夜子はまた賽を振つた。『お、二つだ!』と言ひながらお坊さんもそこに坐つたが、急に調子を替へて、

『今夜は歸ることにしやせう。』と小母さんに向つて言つた。

『なんですねえ? お歸んなはんのけ、今夜?』

と小母さんは吃驚したやうに顔をあげた。

『もう一と晚お泊んなすつたらようござせう、こんなに遅くなつたんだもの……』

『いや、今夜はいくらなんでも歸らなくちやあ。それに先刻馬にも今日は是非とも歸るからつてさう言つてやつたで……。チト今度は長逗留過ぎたわい。』

『それぢやつて貴方あなた、こんなに雪が降り出したのにこんな晩に是非とも歸んねけりやなんねつていふほどの用事もありますまい。』

『あら、雪が降つて來たの? 小母さん!』と小夜子はいきなり首を擡げて目を瞠みはつた。

小母さんはそれには返事をしなかつた。耳をすま

して凝ぢづつ乎と外の物音に氣をとめると、氣のせゐか、さやくさやくと微かすかな音が聞えるやうでもある小夜子は少しく歸りが心配になつたが、雪なら袂たもとでもかぶつて行きあいゝと思つて、又雙六の面白さに紛れてしまつた。けれどもなんだかもう腰を折られて初めのやうに面白くなくなつた。小母さんもお坊さんもそのまま黙つてしまつてるのが氣になつて、ひよいと顔をあげた時に、小夜子は少からず吃驚した。火鉢のふちに肘ひぢをかけた兩手の間に顔を埋うづめて下を向いて居る小母さんの顔から、ぽとりくと露つゆが落ちて灰を叩いて居るのである。小夜子は目を丸くしてお坊さんの顔を見た。お坊さんは手持無沙汰に腕組みをして居たが、チラリと小母さんの方を見遣つて、見つめて居る小夜子のきよとんとした目に出つ遇くわすと、如何いかにもてれたやうに慌あわてゝ目を外らした。まさ代さんは小母さんの脇手の方に居たのちつともそんなことには氣がつかないらしかつた。お坊さんはやつぱり其夜ずるくに泊ることになつてしまつた――。

瞬間的に泛うかんだこんな記憶を、小夜子は珍しさうにしてその前後を繰りひろげようとした。そしてふと、小母さんの涙に就いて考へかけた時に、憚はばかるものを直視した時のやうな、眩まぶしさと氣の毒さとを味はつたのであつた。

底本は総ルビですが、一部のルビのみ残しました。底本と行を合せるために、半角スペースを挿入しました箇所があります。

初出・底本：「女子の友」大正五(1916)年三月

テキスト入力：小林 徹

公開：令和五(2023)年11月四日

リンク：[水野仙子 作品年譜](#)

謝辞：底本コピーを^ご提供下さいました菅野俊之様に厚く御礼申し上げます。